特集　地域の中の「コミュニティデザイナー」はいかに生まれるか

《3》横浜でつながりを創る人々に伺う

⑨ 地域の拠点施設とのネットワークから子育てパパの交流を生み出す「パパが楽しいだけでなく、ママや子どもたちにも喜んでもらえる活動に」

きっかけは妻に勧められて参加した父親向けイベント

子育て中のパパたちに集まってもらい、育児に関する情報交換やお悩み相談などを行う「子育てパパの井戸端カフェ・パパトーク」という座談会形式の交流イベントを開催しています。港北区の各地域ケアプラザの部屋をお借りして、男性だけの子育てトークを2時間たっぷり行います。毎回10～15人くらいが参加していて、これまで4回の開催で、50人以上の方が来てくださいました。参加者は私たちと同年代の30代前後の方が多いですが、20代や40代の方もいます。育休をとって「専業主夫」をやっている方もいますね。

参加者は口コミで来られる方が多く、港北区地域子育て支援拠点「どろっぷ」（大倉山三丁目）による支援が大きいです。どろっぷに来たお母さんがチラシをもらって、旦那さんに「あなたも行ってきたら？」と勧められて来るケースが多いですね。どろっぷ以外にも、区役所の区民活動支援センターや地域ケアプラザに置いているチラシを見てくる方もいます。私自身も子どもが生まれて約10か月の頃に、新吉田地域ケアプラザで開催された父親向けのイベントに妻に勧められて参加したのが最初でした。

初対面の男性同士でも子どものエピソードなら話せる

毎回新しいパパが半数くらいいるので、最初は自己紹介から始めますが、子どものエピソードをというと、皆さん何かしら嬉しそうに話してくれます。男性同士ですと、初対面でなかなか会話がはずまないこともありますが、子どもの話がお題になることで、会話のきっかけが作りやすくなりますね。子どもの年齢は0歳から4、5歳と幅がありますので、少し大きい子を持つ方が共感しながらアドバイスをすることもありますし、どこまで子育てや家事に参加するのかという話で盛り上がることもありますよ。

参加者は日吉、綱島、大倉山エリアにお住まいの方々が中心です。これまで新羽、樽町、大豆戸の各地域ケアプラザで「パパトーク」を行いましたが、それぞれご近所にお住まいの方々が新たに参加され、登録メンバーを増やしてきました。妙蓮寺など他の地域のパパたちとの交流もあり、昨年末の忘年会では合同開催で20人以上の大宴会になりました。

「パパトーク」以外の活動としては、地域のお祭りにパパたちだけで模擬店を出店したりしています。普段料理をしないパパでも作りやすい焼き芋やポップコーンが多いですね。今年の6月に「どろっぷデー」というイベントでポップコーンを販売したのですが、参加したパパたちに1日の販売目標を掲げましたところ、パパたちの目の色が変わり、呼び込みや出張販売をみんなで行い、見事目標を達成しました。さすが普段から厳しいビジネスの世界で生きているお父さんだなと感心しました（笑）。

助成金への申込がきっかけで「パパサンゴー」を結成

今の活動を始めたきっかけですが、子どもと一緒に行ける無料の施設ということで「どろっぷ」に出入りしているうちに、地域とのかかわりを面白いと思うようになりました。どろっぷ内には「どろっぱ」というパパサークルがあるのですが、2013年にどろっぱで行われた「パパ達の瓦版」という座談会イベントに参加しまして、その会の議事録編集の中で、パパ同士で自主的に意見を出し合い、役割分担しながらものづくりをするということを通して、活動の経験値を貯めていきました。

そんな時にどろっぷのスタッフの方から、港北区の「地域のチカラ応援事業」を紹介され、その助成金に申し込んで、パパたち自身が主体となった活動をしてみませんか？という話をいただきまし

浦瀬　亘さん（語り手）
子育てパパと家族を応援するパパ主体の交流・情報交換サークル「パパサンゴー」代表。港北区在住、一児の父。

及川　康志さん
「パパサンゴー」メンバー。港北区在住、一児の父。

聞き手
浦山　剛
港北区港北土木事務所管理係長
北風　保
港北区地域振興課地域力推進担当係長

た。それをきっかけとして、当時どろっぷによく顔を出していた8人のパパたちで、「パパサンゴー」というサークルを「どろっぷ」からの派生グループという形で立ち上げました。2014年度の助成金では、「パパトーク」を継続的に開催するとともに、トークの内容をまとめたリーフレット「P35」を配布しました。2015年度も引き続き「パパトーク」への助成をいただき、活動を続けています。

「パパサンゴー」に参加してくれている方々は30～40代の働き盛りのパパたちが中心。皆さん仕事があるので忙しく、参加したいけれどなかなか来られないパパもいます。私も広告関係の会社に勤務するサラリーマンですので、仕事が終わった後にこの活動の資料を作ったりしています。あまり無理せず、ゆるやかに活動していきたい気持ちはありますが、人に強制してまでやるような活動ではないので、今日来てくれている及川さんをはじめ、一緒に取り組んでくれる他のパパたちの力を借りながら、できるだけ役割分担してもう少し組織的なものにしていけば、息の長い活動になると思っています。

パパトーークの様子（樽町地域ケアプラザ）

「ネットワーク」の力で地域のパパたちとつながる

この活動を続けていけるのは、やはり子どものためだからですね。元々こちらの地域に住んでいる地元の方たちですと、町内会や青年団などで地域のかかわりに参加している方もおられると思いますが、私のように遠方から引っ越して来た人は地域とのつながりが希薄で、本当に住むだけの場所という感覚になります。ただ、子どもにとってはここが地元になるわけで、地域の良いところを見つけたり、様々な人たちとのつながりを作りたかったということがあります。

例えば、テーマパークや都会の有名なスポットは確かに面白いけれど、時間的にも金銭的にも毎週は行けない。でも、いろんなお父さん方と話していると、近所の公園や安いお店など、お金をかけないで遊ぶ場所などの情報が入るんですよね。あそこは結構時間もつぶせて、子どもたちも楽しめるよとか、あそこの店は子どもが小さくても気軽に入れるよとか。他にも、飲み友達になったパパの行きつけのお店に連れていってもらったり、仕事と全然違うつながりができるのは新鮮ですね。

私たちの活動を通じて地域で人と人をつなげるためには、やはり今すでにある「ネットワーク」とどうかかわっていけるかだと思います。先ほども出ましたが、地元以外で働くパパたちは地域との関係が希薄で、普段は仕事に忙しい。自分たちだけでは地域の他のパパたちとの関係を広げることは困難です。そういう意味で、普段お世話になっている「どろっぷ」のスタッフの皆さんや、地域ケアプラザの地域活動交流コーディネーターの方々には、大変なお力をお借りしています。

地域にある拠点施設を訪れたママたちから、パパたちに情報が伝わる。最初から自主的に参加しようとするパパはなかなかいませんので、ママに背中を押してもらうことは重要ですね。こういう活動に我が家のパパが参加することで、ママの息抜きの時間ができたり、平日にはない、子どもとパパだけのかかわり方があるといったことが、まず家族に伝わればいいですね。例えば、「もしかしたらうちのパパもイクメンになるんじゃないかしら」とか、「家でスマホ弄ってるくらいなら、他所のパパがどうしているのか見てきたら？」とか、そんな理由でいいんだと思います。本来家族と過ごす、土日の貴重な時間なので、「パパのためだけの活動」ではだめで、ママや子どもたちのためになるように、各々のパパがしっかり考える機会にしたいと思っています。

最後に、この活動は子どもが小さい時だけのかかわりにならないように、長く続けていきたいと思っています。会社中心のパパは地域とのつながりが少ない。定年後に行き場がないということにならないよう60歳、70歳になっても続く交流にしたいですね（笑）。

【インタビューを終えて】

働き盛りの30、40代で民間企業に勤め、ここまでできることに素直に感動しました。やっぱり、仕事も遊びもボランティアも何か自分の中でメリットを見つけ楽しむことが重要なのだなと改めて感じました。自分も地元活動にもっと積極的に参加しようと思います。（浦山）

仕事との両立が大変だと言いながら、楽しそうに話されていたのが印象的でした。家族や周囲の理解と協力を得ていることと、それぞれの長所を生かした役割分担が活動の秘訣と感じました。（北風）